

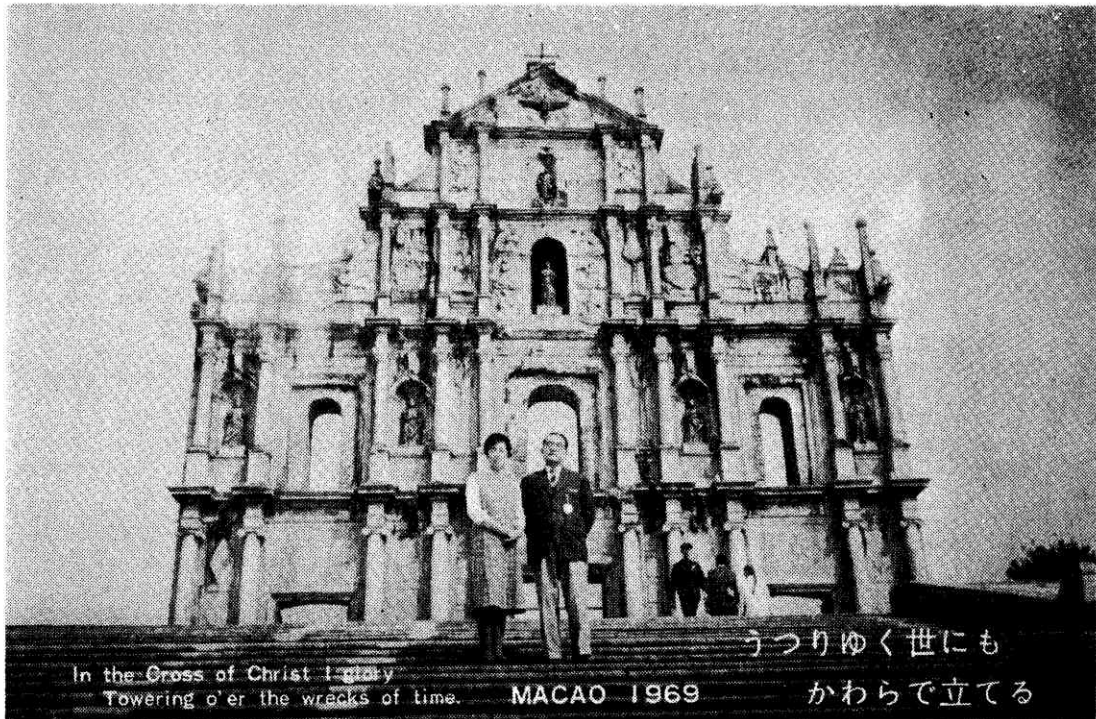
世界の名作讃美歌へ貢献した日本人の功績

前 川 金 治

IN THE CROSS OF CHRIST I GLORY

古今の名作にはモデルがあるといわれている。我が国の代表的な短調の不朽の名作“荒城の月”についても作詩者、土井晩翠がモデルにしたのは仙台の青葉城であり、作曲者、滝廉太郎のモデルは九州の竹田城である。

世界の賛美歌史をひもとくと日本人が世界の松舞台に貢献した一頁がある。物語りは今から 333 年前の1637年の頃であった。信仰の迫害のため長崎を追われた日本のキリスト教徒がポルトガル領マカオに移住し、市の中央西寄りの小高い丘の上に、聖パウロ天主堂を建てた。ところが、1835年に出火し、現在はその前壁だけが残って立っている。この大火の10年前、当時ホンコンの総督であった、ジョン・ボーリングがこの大聖堂の頂上に在る十字架に心うたれ、この傑作を完成したのである。



ポルトガル領マカオにある聖パウロ教会と筆者夫妻

IN THE CROSS OF CHRIST I GLORY

In the cross of Christ I glory,
Tow'ring o'er the wrecks of time ;

All the light of sacred story
Gathers 'round its head sublime.

When the woes of life o'ertake me,
Hopes deceive, and fears annoy,
Never shall the cross forsake me :
Lo ! it glows with peace and joy.

When the sun of bliss is beaming
Light and love upon my way,
From the cross the radiance streaming
Adds more luster to the day.

Bane and blessing, pain and pleasure,
By the cross are sanctified ;
Peace is there that knows no measure,
Joys that thro' all time abide.

(日本基督教団讃美歌委員訳)

139 番

うつりゆく世にも かわらで立てる
主の十字架にこそ われはほこらめ。

聖書のひかりは つみをあがなう
十字架のうえにぞ みなあつまれる。

おそれとなやみの せまるときにも、
十字架はやすきと よろこび満てり。

十字架の上より さしくるひかり、
ふむべき道をば てらしておしう。

わざわいさいわい よしあしともに、
ただ十字架にこそ きよくせらるれ。

日本福音連盟 “聖歌”

中田 羽後 訳

162 番

じだいのはいきよに あおぐ十字架は
まこととあいとに かがやきて立つ

世にはなにひとつ たよるものなし
十字架を唯いつの のぞみとぞなす

世界の名作讃美歌へ貢献した日本人の功績

ひかりとあいもて ふむべきみちを
おしえみちびくは 十字架あるのみ

十字架はなみだも よろこびにかえ
まがもみめぐみを 得るおりとなす

(まが=わざわい)

同歌副が

457 番には

世のなかのものは かわるけれども
十字架はいつでも かがやいている

ひとはかみさまの かわりにならぬ
なぐさめるものは 十字架ばかりだ

十字架は夜みちに まようものを
ひかりとあいもて みちびいていく

なやみもなみだも 十字架はかえて
あがないをうける いとぐちとする

マカオへの旅

真新しい空港ビルに営業を開始したばかりの大阪国際エア・ポートをJALのジェット機で飛び立ったのは、小雪のちらついていた2月の初旬であった。台北と香港で講演をすませ、香港島から大型水中翼船でポルトガル領マカオに着いた。太陽がはや太平洋の彼方に沈む頃であった。友人、楠本君の好意で差し向けられた自動車でエストリル・ホテルへ行き、ポルトガル料理に舌つつみをうち、心地よい一夜をすごした。

快晴にめぐまれた翌朝、タクシーを走らせ待望の丘に着いた。いつ崩れ落ちるかも知れないと懸念されていた前壁と、その4階の屋根の頂上に立っている十字架は、さいわいなことに、そのまま残っていた。333年の昔を偲び、しずかに坂を下り、幾度も十字架をふり返った。

Best-Loved Hymn Stories

by ROBERT HARVEY

ZODERVAN PUBLISHING HOUSE,

GRAND RAPIDS, MICH.

(67頁)

ホンコンから入り江を横切った半島の西側に昔のポルトガル植民地マカオがある。市を見おろす丘の上に、1580年司教区と定められグレゴリー13世の後に聖パウロ大聖堂として建られた教会の廃きよが立っている。1835年火災で破かいされたが、1859年に再建された。廃きよの上に破風壁が残り、その頂上に時の荒廃を無視しているように一つの十字架

世界の名作讃美歌へ貢献した日本人の功績

がそびえている。ジョン・ボーリング卿がホンコンの総督の時マカオを訪れこの威厳のある廃きよの十字架を見た。彼はここで深い感激を受けたので後日“うつりゆく世にも、かわらで立てる、主の十字架にこそ、われはほこらめ”のテーマとして、この十字架を使った。

ジョン・ボーリング卿は多才な人で又高い教育を受け、ヴィクトリア女王の治世に英国へ顕著な貢献をした人である。1792年10月17日ディヴオン洲のエクゼターで生れ、成長して多くの学科を学んだ。彼が鋭い熱心をかたむけたのは歴史、経済、政治、博物、詩及び語学であった。ヨーロッパとアジア語の中で彼が熟知していたのは20を下らない。公務多忙の中に時を見出し数多くの翻訳を出した。その中には、ロシア語、スペイン語、ドイツ語、ポーランド語、ボヘミア語等の詩集もあった。1825年にウエストミンスター・レビューの編集長に任命され、スコットランドのキルマーノック区から選挙され下院議員として2ヶ年奉職した。

1834～1835年フランスへの通商代表となった他に英国の官界に偉大な功績を残した。1849年ホンコン領事に、又1854年ホンコン総督に任ぜられた。そして、この年ヴィクトリア女王よりナイトの爵位を授けられた。

ジョン・ボーリング卿の出版物は多く、又それらの中に多数の讃美歌が含まれている。1823年に“朝禱と晩禱の讃美歌”が出版され、二年後に“朝禱讃美歌続編”が現われた。80才の高令で1872年11月23日に世を去った時、夫人は“聖詩の記念集”を出版した。彼の作品の多くは、ほとんどの教派の讃美歌に採用されている。中でも不朽なものは“神は愛なり”、“夜を守る友よ”、“うつりゆく世にも”等である。

The Rise and Growth of English Hymnody by HARVEY B. MARKS Fleming H. Reuell Co., LONDON

(131頁)

ジョン・ボーリング(1792—1872)は中国とスペインへの毛織物の輸出に大変成巧したチャールズ・ボーリングの小供として生れた。父親はジョンが彼の輸出商の後継者となることを望んだ。このため、ジョンは外国語の勉強を始め、16才でスペイン語、イタリア語、ポルトガル語、フランス語、ドイツ語を書くことも話すことも出来た。商人としての経歴を始める前にジェレミー・ベンサムの下で政治経済を学んだ。父の死後、ジョンは地中海貿易に着手し英国海軍への物資保給のため莫大な契約を獲得した。彼の親友ジョージ・ボーローも語学の天才であり、二人そろって大いに外国語の勉強につとめた。1870年に二人が共同で“デンマークとノールウェイ文学”と題する書物を著した。後にボーリングはボヘミア、ブルガリア等スラブ語の詩の翻訳を書いた。これらの貢献のためオランダの Groningen 大学より博士号を受けた。後にキルマーノック区から下院の議員に選挙された。1854年にホンコンの総督になり、ナイトの爵位を与えられた。

彼が世を去った時、彼の妻が石碑に、この詩の初行

“キリストの十字架にこそ
われは誇らめ。” (讃・139)

と書いた。

MUSIC IN EVANGELISM

by Phil Kerr

GOSPEL MUSIC PUBLISHERS

Glendale, Calif.

(128頁)

“しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない。”

ガラテヤ人への手紙 6章14節がこの詩の源であり、1825年発行のジョン・ボーリング讃美歌集によると原名は“十字架に栄光を”であった。

著者は1792年10月17日生れの英国人で1872年11月23日に世を去った。幼少より輸入商であった父を助け、広く旅行をした。16才の時にはスペイン語、ポルトガル語、イタリア語、ドイツ語、オランダ語を話した。後年、彼は200余の外国語を話すことが出来たといわれている。彼は英国の国会議員になり、香港の総督になり、又カントンの領事にもなった。彼の手になる讃美歌も多く、又、政治や宗教の分野にも著作が多い。終身ユニテリアンであったが、この詩が示すように彼は三身一体の教理を堅く信じていた。

ラスバンと名づけられたこの曲は、コンキーがコネティカット州ノールウィッチの中央バプテスト教会のオーガニストであった1849年に作曲された。彼の牧師は“臆い”という題で一連の説教を用意していた。どんよりとした空の日曜日の朝、礼拝に奉仕する聖歌隊はソプラノただ一人の外はだれも顔を見せなかった。不快になったコンキーは牧師の説教の前に横の出口から逃げるようにして家にかえった。その午後、悔悟した彼は、牧師が次の日曜日に使うはずであるボーリングの詩に新しい曲をつけようと決心した。このようにして新曲が生まれ、忠実なソプラノであるラスバンの名をこれに与えた。

コンキーは1815年5月15日にマサチューセッツ州シャッツベリーに生れた。両親はスコットランド人であった。彼が死んだのは1867年4月30日で、所はニュー・ジャージー州のエリザベスであった。彼は、熟達したオーガニストであり又バスの歌手であった。

Dictionary of Hymnology

by John Julian

DOVER PUBLICATIONS, INC, NEW YORK

(566頁)

ジョン・ボーリング作、1825年発行、原詩は五節、ガラテヤ 6章14節による、大英帝国とアメリカの多数の讃美歌集に収録される、ボーリング作中の傑出したもの。

詩は、ある集には“In the Cross of Christ we glory”と書かれているものもある。

Christian Hymnody

by Edmond D. Keith

Convention Press, NASHVILLE TENN.

(93頁)

ジョン・ボーリング (1792—1872)

世界の名作讃美歌へ貢献した日本人の功績

ローバート・グラントのようにジョン・ボーリングは社会的、政治的功績のためナイトの爵位を授けられた。しかし、彼が記憶されているのは彼の讃美歌のためである。英国の下院議員やホンコン総督として、生存中、彼は数多くの栄誉を身に受けたが、彼が今日、クリスチャンの中にその名を知られているのは次の讃美歌のためである。

うつりゆく世にも (讃美歌 139)
ものみよかたれ (聖歌 187)
めぐみの光は (聖歌 441)

Hymns of Our Faith

by WILLIAM J. REYNOLDS

BROADMAN PRESS, Nashville Tenn.

(95頁)

ジョン・ボーリングによるこの讃美歌はガラテヤ人への手紙6章14節に基礎をおいたもので1825年発行のボーリング讃美歌集に始めて現われている。詩の第5節は第1節の繰返しであるので讃美歌には省略されている。魅力ある、そして度々語られた物語によると、この詩はホンコンの近くのマカオ島の、かつて偉大な聖堂であった建物の廃きよによって靈感をうけて作られたというのである。建物は破かいされたが、前面の壁だけが残りその頂上に年とともに黒くなった大きい十字架がついている。ボーリングはこの古い十字架を見ながら“うつりゆく世にも、かわらで立てる”と書いた。

曲のラスバンは1849年コネティカット州ノールウィッチの中央バプテスト教会オーガニストであったコンキーにより作曲された。この曲は最初1851年、グレートレックスの詩篇と讃美歌曲集の中のミュレンバーグ作詩の“主よ、汝の群を養い給う”につけられたものである。マッカチャンが1907年発行のノールウィッチ・ブルティンに次のような記事を書いている。

都会の牧師ヒスコックス博士は“十字架上の言”から七つの説教を用意していた。そのうちの一つの日曜日はひどい雨であった。聖歌隊の指揮者コンキー氏は、ソプラノがただ一人だけしか出席しなかったので全く失望した。コンキー氏は非常に失意、落胆したので前奏曲がおわるとオルガンを閉め鍵をかけワシントン街の自分の家にかえって行った。聖歌隊の席は教会の隅にあったので会衆の注意を引かずにギャラリーを去ることが出来た。その日の午後 練習のため彼はピアノに向った。ヒスコックス博士の連続の説教と、その時歌わる讃美歌の言“うつりゆく世にも”が彼の頭の中を繰返し、又繰返し通りすぎた。その時、そこで彼は、今日、凡ての教派の教会で世界中に歌われているラスバンの曲を作ったのである。

A Hymn Is Born

by Clint Bonner

BROADMAN PRESS, Nashville, Tenn.

(56頁)

1849年のある雨の日曜日、コネティカット州ノールウィッチにある中央バプテスト教会の礼拝のためヒスコックス博士は“十字架の言葉”の説教を用意したが、会衆の殆んどが

世界の名作讃美歌へ貢献した日本人の功績

欠席であった。聖歌隊もソプラノのB、S・ラスバン夫人ただ一人。面目を失ったオーガニストのイサマー・コンキーは帽子をかぶり、愛想をつかせて、裏の階段から出て家にかえった。

その朝の礼拝の牧師の説教を聞かないで教会を去ったことを悔やみながら、コンキーは“十字架の言葉”を深く考えてみた。その時、彼はジョン・ボーリングの“キリストの十字架にこそ、われはほこらん”の詩を思い起した。それにつけられた曲がよくなかったのでコンキーの聖歌隊はこの讃美歌を本気で歌ったことはなかった。詩はすばらしいが曲がよくなかったからであった。もし、曲がそのままであったとしたら、この讃美歌も、あるいは、消え去ってしまったかもしれない。雨のふりつづいたその日曜の午後、コンキーはジョン・ボーリング卿のため新しい曲を書いた。彼はこの新曲をラスバンと命名した。それは、この日曜日の朝ただ一人聖歌隊員として出席した彼女の名譽のためであった。

Stories of

FADLESS HYMNS

by W. Thorburn Clark

BROADMAN PRESS NASHVILLE, TENN.

(13頁)

ニュー・ヨークのロバート・コリヤー博士が、カリフォルニア州のある峠にさしかかった。峡谷の頂上ちかくに旅行者の休けいのための一つの小屋があった。博士がそこを立ち去ろうとした時、小屋番の夫人が、博士が牧師であることを知って、近くのそびえ立つ岩に案内した。その狭い岩だなの上に、くつきりと立っているものがある。それは十字架であった。牧師はこれを見て大変驚いた。それはだれも十字架を作る木を背負ってよち上ることの不可能な絶壁の上にあったからである。

博士は、どうしてそのような困難なことが出来たのかと尋ねた。夫人は次のように語った。少し前に大地震があり、住人の少いこの地で人々は世の終りが近いと感じ疎開しはじめた。しかし、この番人夫婦にはそこに留まり、小舎を修理するより他にすることがなかった。その後、ある日、彼女は仕事をしながら山を見上げた時、すばらしい光景に接した。あの大地震が頂上の巨大な松の大木の幹の大枝を十字架の形に変えてしまった。彼女は、自分のためにこの奇蹟がなされと感じるほどであり、しばしば彼女を襲ういろいろな心配ごととも、この山の上の十字架を見上げるといつも慰められるのであった。

いつの世にも十字架は悩む心に慰めと喜びを与える。

この信仰ふかい夫人の最後の言は“真の幸いはイエスの十字架のそばにございます。”であった。

サムエル・L・ツェマー博士は“世界の宣教師評論”の中で“キリストの死を取り除くとキリスト教会の讃美歌はみな無価値なものとなる”といった。

この偉大な讃美歌の中に

“主の十字架にこそ、われはほこらめ”

がある。

この詩は1825年ジョン・ボーリング卿によって書かれたものである。この作者は1792年10月17日英国のエクゼターに生れた。初等教育はハムステッドのモーアトンで受け、後に中国とスペイン向き毛織物の製造業であった父の仕事についた。しかし、文学に多分の趣

世界の名作讃美歌へ貢献した日本人の功績

味を持ち、ウエストミンスター、レヴィユーの編しゆう者となり、又詩人としても著名な成功をおさめた。1823年と1825年に讃美歌集を出版し、終身、讃美歌を作詩しつづけた。

彼は外国語の修得に非凡の才能を示し、偉大な語学者であった。サムエル・H・ダフイールド博士は“英国讃美歌とその作者”の中でジョン・ボーリングは16才になるまでにスペイン語、イタリー語、ポルトガル語、ドイツ語、そしてオランダ語を独学した、と書いた。フランス語だけは教師についた。

ボーリング氏は政界に入り、1835年に下院議員に選挙され何年かこの職にあった。1845年に中国カントンの領事に任ぜられ、その後名誉ある要職を経てついにホンコン総督に任ぜられた。この他、英国のため、いくつかの重要な使命を完成した。1854年に爵位を受けジョン・ボーリング卿となった。

“うつりゆく世にも、かわらで立てる”は彼がマカオの大聖堂の廃きよを見たことが一つの衝動となって彼に書かせたと言われている。讃美歌学者によりこの作品の年代につれがあるが、大使徒パウロの言“主イエス・キリストの十字架の他に断じて誇ってはならない”に靈感をうけたことは確実である。

官界から引退後もボーリングの毎日は多忙をきわめた。この過労の故に彼に諫言するだけでも彼の答は“生命が与えられている間私の仕事をしなければならない。”であった。晩年、彼は讃美歌を書くこと、他人とくに青年を助ける事業と主の聖業の前進のため全力を捧げた。彼の最後の働きの一つは、彼には何の関係もない見知らぬ人への愛の運動であった。

非凡の献身と奉仕の生涯を終え、1872年11月23日にこの世を去った。エクゼターにある彼の墓石に“主の十字にこそ我はほこらん”の文字が記されている。

彼の筆になる他の有名な三つの詩に“神は愛なり”、“めぐみは輝き”、“夜を守る友よ”がある。

“うつりゆく世にも”はどの集会にも適した讃美歌である。大会衆にキリストの十字架を示すためには、この讃美歌ほど心に強くせまってくるものは他に余り多くはない。1910年にアメリカの首都ワシントンで開催された世界日曜学校大会の様子をC・G・トランバル博士は次のようにサンデー・スクール・タイムズに発表された。

“今大会には24ヶ国から47の教派の代者達と175人の宣教師達が出席した。開会式の時全ホールが電灯が消え、全くの暗の中でキリストの十字架が照し出され、児童合唱団が、“うつりゆく世にも、かわらで立てる、主の十字架にこそ、われはほこらめ”を歌った。そして、この賛美がやがて全会衆の参加で大合唱に展開した。

キリストの十字架は、いつれの国、いつれの時代にも青年達の、そして、老人達の最も重大な必要に答えるものである。基督者はこの賛美を歌う時いつもよろこびを見出すのである。

詩の原文の訳

時の破滅の上にそびえる、
キリストの十字架に私はほこる。
聖なる物語のすべての光が
荘厳な頭のまわりに集まる。

世界の名作讚美歌へ貢献した日本人の功績

人生の苦悩が私を襲う時

望は欺き、また、恐怖が悩ます時

けっして十字架は私を見捨てない

見なさい！ 十字架は平和と喜びで輝いている。

幸福の太陽が かがやき

光と愛を私の道の上にはなつ時

十字架より光輝が流れ

一日になおも栄光を加える。

害毒と祝福、苦痛と快樂は

十字架により聖別される。

無限の平和がそこにあり、

喜びが、凡ての時を通じて やどる。

ついでに、ジョン、ポーリングのいま一つの名作 **WATCHMAN** を我国英文学界の泰斗齊藤勇博士の名訳で紹介する。

「衛士よ、夜は何時でしょう。それが示す約束のしるしは何でしょう。」

「旅人よ、むこうの山の頂きの上に栄光を放っているあの星を見なさい。」

「衛士よ、その星のうるわしい光は何か喜びなり望みなりの兆ですか。」

「旅人よ、そうです。それがあの日を、イスラエルが救われるという約束の日を持って来るのです。」

「衛士よ、夜はもう何時でしょう。ますます高くあの星はのぼりますね。」

「旅人よ、祝福と光明と、平和と真理とはその進路の前兆です。」

「衛士よ、その光は発祥地だけを金色に染めるのでしょうか。」

「旅人よ、よろず代をあの星は照らします。全地の上に光が急に閃めいたじゃありませんか。」

「衛士よ、夜はもう何時でしょう。あけがたのように見えますか。」

「旅人よ、暗闇は逃げ去り、疑いと恐れとは引きさがりました。」

「衛士よ、あなたも巡視をやめて、静かなおうちに急ぎなさい。」

「旅人よ、ごらんなさい。平和の君が、神の御子がいらっしまいました。」